

創建

そうこん

2011・12・10 VOL.46 NO.4 (通巻140号)

巻頭言：若井正一・1
 卒業生の活躍紹介・2～3
 日本建築学会賞（技術）受賞記念：栗岡均・4～5
 中期海外派遣研究報告：野内英治・6～7
 構造設計インターンシップ体験報告・8
 J I A東北建築学生賞／造園学会WS／ロハスの家3・9
 第54回日本大学工学部学術研究報告会・10
 日本建築学会大会発表論文／学術論文・11
 教室ニュース・12

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

昨年夏、人間環境系の国際会議に参加するため、ベルリンの壁が崩壊してから20年の節目となるドイツへ出張した。開催地は、ザクセン州のライプツィヒ市であった。同市は、人口が約52万人の旧東ドイツ第2の都市である。市中心のマルクト広場周辺には、かのバッハが音楽監督をしていた聖トーマス教会や、世界的に知られたオーケストラホールの「ゲヴァントハウス」などがある。また、同市内には、路面電車が走り、古い町並みの中に近代的ビルが混在する新興都市である。国際会議場は、ライプツィヒ駅前から路面電車で約20分のドイツ環境省の研究施設であった。開催期間中、世界各国からの参加者たちによって熱心な発表や討論等が行われた。恒例のオープニングセレモニーは、重厚な石造りのライプツィヒ市庁舎内で行われた。当市長が来賓挨拶の中で、20年前の東西ドイツの統一は、ライプツィヒの市民運動がきっかけになったことを熱く語っていたのが印象的だった。なお、ドイツ初の女性宰相となったメルケル首相は、ライプツィヒ大学の卒業生である。

私は、今回のドイツ出張の際に、ぜひとも訪問したい場所があった。そこは、ライプツィヒ市から車で約1時間のデッサウ市にある世界文化遺産の「バウハウス」である。私がバウハウスに関心を持った契機は、東京国立近代美術館で開催された「バウハウス展」を観た学生時代の頃からであった。その展示の中で、建築や工芸デザインの作品とともに、前衛的な創作舞踊が紹介されていたことなどが、ずっと気になっていた。

バウハウスは、1919年に、建築家

のワルター・グロピウスらによってワイマールに創立された建築、工芸、写真、デザインを総合的に学ぶ国立の造形芸術学校であった。1925年にデッサウに移築されたが、1933年にナチスにより閉校となった。この間、わずか10数年間であったが、多くの建築家や工芸家を輩出した。閉校後、最後の校長ミース・ファン・デル・ローエは、アメリカに亡命してモダニズム建築の先達として活躍した。

初めて訪れたバウハウスの校舎は、予想していたよりも小規模な建物で、創建当時のままに保存されていた。

ハーメルンの笛吹き

教授 若 井 正 一

校舎内には、当時使用していた家具や照明器具などが残され、前衛的な舞踊などを発表したステージや舞台裏を観ることができた。校舎近くには、グロピウスやカンディンスキーらの教員住宅が当時のまま保存され、それらの一群の建物施設が1996年に世界文化遺産に登録されている。

さて、ドイツ内陸には、メルヘン街道といわれるグリム童話ゆかりの諸都市がある。有名な「ブレーメンの音楽隊」のように地方都市を舞台とした多くの民話がある。その中にグリム兄弟が伝承を記録したという民話「ハーメルンの笛吹き」がある。この民話は、ドイツ北西部にある小都市ハーメルンで、1284年にあった史実をもとに伝承されている物語で、その内容は、次の通りである。

『当時、ハーメルンにネズミが大量

繁殖して家々の食料などを荒らして、町の住民が大変困っていた。そこに「ネズミ捕り」を名乗る男が現れた。町の住民は、その男にネズミを退治したら大金を支払うことを約束して依頼した。すると、その男が、笛を取出して吹き始めると、町中にいたネズミの群れは、その笛の音に惹かれて町の外にある川の中へと入って消えてしまい、一匹もいなくなった。その男は、町の住民に約束の大金を求めたが、支払を渋ってわずかしお金を渡さなかった。怒った男が、再び笛を吹き始めると、今度は町中の子供たちがその笛の音に誘われてその男とともに町の外にある洞窟の中に入って消えてしまい、二度と町には戻って来なかった。』

この民話は、町中から子供たちがいなくなるという悲しい結末の物語である。子供たちがいなくなった親たちの嘆きは、如何ばかりであろうか。その史実に関しては、当時流行した疫病説や集団移住説など諸説があるようだが、定かではない。

私は、このドイツ民話と原発事故で避難している福島の子供たちが、なぜか同じように思えてならない。

本年3月11日に発生した東日本大震災では、地震や津波で約2万人の命が奪われた。そして、福島原発事故は、いまだ収束する気配がない。そんな中、ある学会で被災地からの教訓と題して調査報告を行ったが、目の前で肉親や家屋を失った悲惨な現実や、福島原発事故の汚染実態を知るにつけ、あえて言葉にすることがとても空しく感じた。願わくは、フクシマに鳴り響く警笛が、一刻も早く止まって、いつものありふれた日常が戻ることを祈るばかりである。

卒業生の活躍紹介

サービス業・構造設計職 構造設計者とは、

岡本 卓実



3月11日の東日本大震災で甚大な被害を蒙られた被災者の皆様、関係者の方々に心からお見舞い申し上げます。

私は卒業後、設計事務所に就職し、学校、病院の構造設計、耐震診断、耐震補強の仕事に携わっております。新入社員時は、新耐震設計が施行されてまだ2年ばかりのため、手探りの状態で先輩に教えていただき、相当な時間を費やして仕事をこなしていたのを思い出します。それから年を追うごとにパソコンや解析ソフトが進歩し、現在見られるような建物の解析が可能となってきました。しかし建築家（意匠デザイナー）の求めた形状をパソコンに入力すれば、解析ができて設計が終わり建築物となることは、今までも将来もまずないのではと考えています。設計においては参考書や日本建築学会より出版されている設計規準書も多々あり、日々改定し技術が進歩しています。また近年は耐震偽装事件により、構造関係の技術基準が法に定められる状態です。これは国民の安全を保障するのは基より、構造設計者の拠所であま仕方ないのですが。建築構造設計者の道に進むとするとその時の規準・法に基づき、自らの判断により最新の技術や知見を鑑みて工学的な判断をし、モデル化を行い安全を確認しながら、意匠デザイナーや設備デザイナーとのディスカッション（時には激論も）し設計することが必要となります。また現在では、机上のみでは無く、工事現場の構造監理・指導・意図伝達を行うことも重要な仕事となっています。建築物は、以前の規準・法がOKであっても現在の規準・法ではNGとなる場合もあり、この建築物の安全を確認するのが昨今の耐震診断と耐震補強にあたります。耐震診断は、診断基準により一般的な建物であれば、ある程度の構造的な知識があれば診断を行い構造耐震指標Is値を求めることができ、倒壊の可能性が高いか低いかの判断が可能です。しかし耐震補強を行うには、新築以上の技術、工学的判断が必要となる場合も多々あり、安全性の確認には構造設計者としては重大な責任が生じることとなります。

皆さんも構造設計者や技術者を志すにあたり、1996年の阪神大震災の教訓及び今回の未曾有の災害においての「想定外」をより設計において考え熟慮し、自らの判断において設計（安全と安心に）するのがこれからの構造設計者には必要となると考えられます。

（おかもと たくみ）

略歴

- 1983年 建築学科卒業（倉田研究室）
- 1983年 株式会社教育施設研究所 入社

総合建設業・施工管理職 感動を創造する

宮口 規章



新しく現場で建物を作る「チームのトップ」、自分にとっての現場監督のイメージはこれに尽きます。下請けの人たちを上手く動かすことによって建物を創る、地図に残す、非常に魅力を感じる仕事です。自分が作った建物を様々な人たちが利用する、住居に絞れば、使ってくれる人の生活の大部分がそこで為されるわけです。他にこんな仕事があるだろうか、といった感じです。

正直、実情に関しては、やはりハードな仕事内容ではあると思います。守らなければならない工期がある、しかし品質は会社としても個人としても納得いくものにしたい、この両立の難しい2条件を成立させることは難関であり、かつ必ず通るものです。これを個人としての経験、知識、さらに会社としてのノウハウをプラスして乗り切れることは非常に大きな醍醐味であり、自分の経験上は己のセンスを発揮し、活かせる職種だと感じます。

現場管理とは大きく分けると、品質・工程・原価・安全管理の4つが柱です。細かく言えば、品質を確認するための写真管理から職人さんが作業しやすい環境を作る安全設備作りとかなり幅広く、詳細なところまで管理します。建物の工法一つ取っても、すでに確立されているものから今まさに考えられている新工法など、様々な種類のものがあります。ひとえに建物を建てると言っても、二度と同じ建物は建てません。如何にこれまでの経験を自分の糧とし、軸とする柱とし、より良い建物を作っていくかを常に模索する、そんな技術者が現場管理という仕事に携わっていると思います。

現場管理という職は、施主から実際に現場で働く職人さん、果ては建物完成後に使用するエンドユーザーまでを相手にします。更地の土地から、新築の建物が建つまでを経験できるのはこの仕事だけです。私たちは同じ場所で、もしくは全く同じ建物を創るということはまずあり得ません。様々な土地で仕事ができるというのも魅力の一つだと思います。何より私個人としては、自分が頑張って考えて段取りを行い、現場がその通りに上手く廻った時はとても楽しいものです。本当に自分で現場を動かしているという感覚です。「センス」と言葉で言ってしまうと持って生まれた才能のような感じがしますが、それは違うと思います。「センス」は今までとこれからの生活の中で色々なことを体験し、行動し、培うものだと思います。建設業はそういった自分らしさを大いに生かして活躍させることができる仕事だと思います。あなたの今までとこれからを、現場管理という立場で思い切り前面に出してみても如何でしょうか。（みやぐち のりあき）

略歴

- 2008年 建築学科卒業（浅里研究室）
- 同年 株式会社福田組入社
- 2011年10月現在 東京で現場管理



CM/PMコンサルタント業務

数々の経験を積み重ね、希望のコンサルタント業へ

長井佐千子



私は現在、コンストラクションマネジメントやプロジェクトマネジメントを行うコンサルタント会社に勤務しています。コンサルタントは学生時代に憧れたものの、当時は新卒の募集がなく諦めた職業です。現職に就くまでに、3箇所の設計事務所勤務と2回のイタリア留学を経験しましたが、それらの経験があったからこそ、念願の職に就けたのだと実感しています。

もともと私が建築の道へ進もうと思ったきっかけは、ヨーロッパの街並みへの憧れからでした。「建築士になり、美しい街並みと建物をデザインしたい」という気持ちから、建築の道を選びました。三浦研究室に入り、ヴェネツィアの都市空間に関する研究に携わってからは、「ヨーロッパの街並みはなぜ魅力的なのか」を探るべく、日々分析に明け暮れ、都市構造を分析することの重要性和奥深さを知りました。漠然と、研究を活かせる職に就きたいと思い始めたのもこの頃です。

- ① 設計事務所に就職し、建築士を目指す
- ② 都市開発等のコンサルタントへ就職する
- ③ イタリア留学をする

就職活動時に迷ったのは上記の選択肢でした。研究を活かせるのは都市開発を行うコンサルタントと考えましたが、当時は募集がなく断念します。最終的にイタリア留学も諦め、公共建築を得意とする設計事務所へ就職しました。ここでは、小・中学校の設計や、生涯学習センター・病院等の設計に携わり、行政協議や施主との打合せを重ね、法規制・施主要望等をまとめあげていくといった流れと設計のノウハウを学びました。

その後、イタリア留学を実現し、ヴェネツィアとフィレンツェで暮らしましたが、特に、学生時代に研究したヴェネツィアでの生活では、ヒューマンスケール都市がいかに不便であるかということと、その不便さを最高の贅沢と考える住民たちがいることによって、街の魅力が生まれているのだと実感しました。

続いて、大手設計事務所の監理業務に携わった際は、設計事務所と施工業者との間で生まれる問題、行政とのやりとりのなかで出てくる課題、そういった課題を解決し、ひとつの建物を築き上げていく工程から、施工・監理のノウハウを学びました。こういった経験で得た知識は、現職にも大いに役立っています。

そして現在は、施主の立場に立って、企画から設計・施工のマネジメントを行うコンサルタント会社に勤務しています。主に私は、都市構造を分析してその土地に最適用途・規模を導き出し、ボリューム検討を行ったり、法規制・都市計画手法を駆使して、最大限の容積を確保したりといった、企画設計を行っています。大学で学んだ都市分析のノウハウや、設計事務所勤務で得た知識、全てのことが現在の糧になっていると感じます。

こうして、これまでの経験を振り返ってみると、当初希望通りにいかなかったことも、常に目標を定めて努力をすれば必ず良い方向に向かうのだと気づきました。在学生の皆さんにも、ぜひ目標に向かって頑張りたいと思います。



(ながい さちこ)

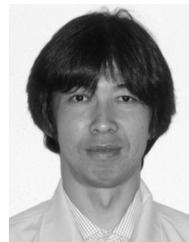
略歴

1997年	博士前期課程建築学専攻修了(三浦研究室)
1997-2000年	株式会社桂設計
2002-2003年	株式会社松田平田設計工事監理業務受託
2005-2009年	株式会社山下設計
2009年	株式会社山下ピー・エム・コンサルタンツ

公務員・技術(建築)職

公務員なんて絶対にいやだ!

鈴木 直人



タイトルが就職活動をしていた時の正直な気持ちでした。当時はバブル好景気の余韻が残っており、大手企業からの求人も、現在とは比較にならないほど。そのような背景もあってか、公務員の人気はあまり高くありませんでした。公務員といえば「定時出勤・定時帰宅」「融通が利かない」「ヤル気がない」「どんな仕事をしているのかわからない」など、ネガティブなイメージが多いのではないのでしょうか。

室内空間に興味があった私はオフィス家具メーカーへ就職し、デザインの仕事をしていました。企業である以上、利益を追求していくのは当然ですが、理想と現実には違和感を覚え、公共の空間をつくること、住民に近い仕事に気持ちが傾いていきました。そんな時たまたま地元の市役所で募集があり、運よく働けることになり、現在に至っています。

公務員の業務はとても幅広く、勤務する役所、部署によっても大きく異なってきます。現在、私の仕事は工事に関する部門で、現場での検査立会、施工図のチェック、修繕工事の設計・積算、設計事務所との打ち合わせ、ある程度の規模の建物なら設計・作図もやります。施主の視点で設計者に要望を出し、設計事務所とともにプランを煮詰め、施工者の立場にたって品質管理を行い、使用者とともに建物をメンテナンスしていく。建物の様々なシーンに関わっていく仕事です。事業全体のコーディネータ的な役割が求められます。

私の場合、地元の市役所ということもあり、自分のまちを作るという行為がリアルに実感できます。去年、担当した小学校の新築工事が竣工しましたが、最初の新入生として、私の娘が入学するという偶然がありました。また、関わった建物の近くを通った時など、「あの建物は、お父さんがつくったんだ。」「えー、すごいね!」と、ちょっとした優越感を感じることも。建物の引き渡しの際、担当者を案内しながら話していると「おしゃれてドラマに出てくるみたいな建物ですね!」という反応もあれば、「使いにくそう、何でこんな風にしたのですか?」などダイレクトな反応が容赦なく返ってきます。利潤を上げるのではなく、市民の満足度を上げるのが公務員の仕事です。

私のまちも先の東日本大震災で市庁舎、学校、公共施設が大きな被害を受けました。復興に向けてかつてない規模のプロジェクトが同時進行しています。幸か不幸かこのような時期に大きな業務に携わることができて、大きな期待と小さな不安が混じった心境です。

就職活動は依然、大変厳しい状況にあるようです。自分の仕事に対するイメージだけではなく、日本大学工学部のネットワークを生かし、多くの先輩方の話を聞いてみることをお勧めします。自分の視野を広げ、モチベーションを高めるきっかけになるのではないのでしょうか。

(すずき なおと)

略歴

1992年	建築学科卒業(若井研究室)
1992年	岡村製作所入社
1995年	福島県須賀川市役所入庁



ダブ重ね梁工法の体育館

日本建築学会賞（技術）受賞記念

— 賢い建築家を目指して —

非常勤講師

日本消防検定協会 技術参与 栗岡 均



はじめに

先日、両親の法事の際に久しぶりに母校を訪れてみました。追われるように母校の地を出て、約40年になります。その間、右も左もわからない技術開発の領域に飛び込み、悩みながら多くの失敗を重ねましたが、今にして思えば新たな挑戦に喜びを感じながら明け暮れた年月でもありました。

今回の受賞は、凡人のわが身にとっては青天の霹靂であり、推挙していただいた先生方、ならびに技術の開発と実用化に際して、ひとかたならぬご指導、ご支援をいただきました多くの皆様に心より感謝する次第であります。

微細な水粒子幕を用いた防火設備の開発

受賞した設備は単に防火区画の性能だけではなく、区画とは相反する性能が要求される避難設備としても従来の設備には無い優れた性能が備わっています。特に様々な目的を持った人々が集まる地下空間や駅の連絡通路などの沢山の人が移動する空間での区画化と従来の設備に見られた各種の物理的制限も無く避難が同時にできること、さらに車椅子などの身体的なハンディを負った人達の避難にも障害が無いことと、一方、不幸にも火災現場に取り残された人々に対しても火災時に発生する熱や煙粒子の洗い落とし効果により生存の可能性が拡がること、消火活動や救援活動時の拠点の形成に役立つなど多くの機能が同時に考慮でき、従来の建築空間の計画手法では実現できなかったのが可能になったことが評価されたものと考えています。

当時、所属していました鹿島建設での開発の一環として人に優しい防火技術として開発されたもので、新しい建築基準法のルートCの第1号物件でもありました。

実建物への適用

法規の改正により高層建物の防火区画の解釈が拡大した結果、当技術の適用が見送られましたが、その後、防火区画に用いる特定防火設備として過酷な性能試験をクリアして一般認定を取得するとともに、自動作動性能ならびに避難支障性に問題がないことでも一般認定を受け避難の分野でバリアフリーを達成した防火設備として世



2011年度日本建築学会賞（技術）の受賞記念撮影

に輩出されました。その後、東京駅前のTOKIA（東京ビルディング）の地下1階の京葉線のコンコースにつながる通路や京王線新宿駅のプラットフォームの階段部などの火災時、人の集中・混乱が予想される空間領域に適用されました。

また、従来の防火設備では実現できなかった曲線など複雑な形状の開口部や内部空間で構成される建築物の区画化に関しては、本設備の得意とする所で、現在台湾で建設途中の施設に適用予定で、新たな空間形態の実現に寄与できるものと考えています。

今、求められていることは

現在、日本は縮減社会を迎え多くの課題を抱えるとともに世界に先駆けて、超高齢化社会に突入しています。社会における建築産業のあり方も問い直され、従来の価値観とは異なった手法や施設の維持管理が求められています。超高齢化社会での安心・安全に直結する防火設備及び避難設備のあり方も、従来の設備とは異なった機能が要求され、まさしく人にやさしい技術が求められています。

幸いにも、日本においては建築・消防両分野において形式的にも性能設計ができる社会となっています。この性能設計手法を用いて、個々の施設に見合ったきめ細やかな対応を行うことが設計者に求められ、これが競争力に繋がるものと考えられます。

一方、性能設計システムが誕生して約10年を経過しましたが、時には不十分な部分が垣間見られます。

社会の制度として、さらに充実させ使い勝手の良いものにするためには、行政側への期待もさることながら、

プロフィール

1948年 大阪府大阪市生まれ
 1972年 3月 北海道大学工学部建築工学科卒業
 1974年 3月 同学部衛生工学科修士課程修了
 1974年 4月 鹿島建設(株)入社
 1992年 4月 同技術研究所に異動
 2004年 3月 北海道大学より博士(工学)授与
 2009年 4月 日本大学工学部非常勤講師兼務
 2010年 4月 日本消防検定協会入社

主な受賞歴

1977年 日本科学技術連盟「石川賞(第8回)」
 2000年 IAFSS Fourth Asia-Oceania Symposium on Fire Science and Technology BEST PAPER -first Prize
 2004年 (社)日本火災学会「日本火災学会賞」
 2008年 (社)建築設備総合協会 第6回環境・設備デザイン賞「設備器具・システムデザイン部門大賞」
 2011年 (社)日本建築学会「日本建築学会賞(技術)」

恩恵を被る設計側の自覚と努力の積み重ねが必要であります。

性能設計化によって、各建築物に適した防火対策を行わなければならない、その性能をいかに合理的に実現するか設計の手腕が問われるとともに、安全への責任も実質的にはかなり設計側に比重が移されています。

利用者側も技術力の研鑽とともに利用にあたってのルール化(倫理の確立など)など、残されている課題は多いものと思えます。グローバル化の動向とともに、競争は国内だけではなく世界的なうねりの中で扉が開かれ、まさに賢い建築家の活躍の場が与えられようとしています。



写真

- 左上：ヘッドの作動状況
- 左中：実験装置の作動開始時の状況
- 左下：実験装置の水幕形成時の状況
- 右上：装置設置空間のイメージ図
- 右下：床面に拡がった煙粒子



リア駅のコーチステーションからバスツアーを利用した。途中、コッツウォルズの田舎町やバスを巡る片道二時間程度の小旅行である。バスとはバス（風呂）の語源ともなった、ローマンバスの遺跡で有名な観光地である。コッツウォルズは英国田舎の美しい村が点在する地域名である。倫敦を少し郊外に出るとそこは羊の丘である。英国は羊と牧草地の広がるのんびりとした風景の連続する国だと倫敦を離れるとよくわかる。ストーンヘンジはそんな羊が群れる丘陵地に突如として現れる。緑一色の平面に巨石が屹立している。回りに点在する白い奴は羊である。近づいたら巨石を取り囲むように遊歩道に沿って人々が連なっているのが見えた。その列に並び、ゆっくりとストーンヘンジを一周した。写真で見知っている形はある特定の角度から見たものだと気づいた。単純に円形に配されてはいない。馬蹄形とでも表現するとよいだろうか。しかも単に巨石を立てただけのものではない。かなり精巧な加工が施されていた。巨石の頂部にダボが確認できる。説明を聞いてみると、巨石間に渡した梁にはダボ穴があり、梁同士も継ぎ加工されているそうである。元々は木造だったらしい。だからストーンサークルではなくウッドサークルだったのだと聞かされた。何でもそうだが実物はやはり良い。もし他の観光客がいなければきっと敵かな気分になっただろう。大英博物館のロゼッタストーンも同じである。写真で見えるものは正面のみだ。裏側へ回ってみたいくないかね？

倫敦で古書店巡り

週末にぶらりと街歩きを楽しんだ。倫敦では週末になると街の広場などに簡便な市が立つ。生鮮食品から骨董品までいい感じのものがそこかしこ並ぶ。単身赴任の身なので鶏一羽や、サーモン一匹、肉2キロなどはさすがに買えぬ。たまに手作りソーセージを揚げたものをこれまた自家製のパンに挟んで売っていたりする。香ばしい匂いが辺りに漂い思わず買い食いしたくなる。素人市の骨董品なので安かろうと思うのだが、値札にゼロが沢山並んでいた。英国人は物を大切に使い続ける人種のようだ。アンティークショップや古書店は至る所に小店から大店まで英国全土に存在する。そしてそこには数世紀前の稀少品が少なくない。純金製の懐中時計を買って帰

ろうと店を回ったが驚く金額だった。さすがに買えぬ。

街歩きをしていると書店も多く見かける。専門書を購入しようと何度か足を運んだが、新刊はネットで買えることに気づいて止めた。送料無料で日本に届くのだ。何もう重い思いをすることはない。そこで古書店を巡ることを思いついた。古書だけは自分の目と足で探さなければ良い物に出会えぬ。とはいえ財布の中身が寂しいので高価な物は一品だけと決めて彷徨いた。結局チェルシーの街外れの古書店で19世紀の釣りの本を見つけ購入した。初版本ではなかったが1869年発行である。私が生まれるちょうど百年前の本である。皮で覆われ手作り感のある逸品で非常に良い状態であった。こういうのに出会えるから英国の街歩きは止められぬ。英国の懐の深さでもあるだろう。

週末はパブで

地下鉄サウスケンジントン駅の横に中華総菜の店がある。週末になると夕方六時頃フラットを抜け出し駅前に向かう。ライスに辛めの中華総菜、そしてタイカレーをかけてもらう。一箱に全部載せである。ラー油を垂らしさらに辛くする。持ち帰らず店の椅子に腰かけて平らげる。店員に飲み物はと聞かれても、いらないと答えないといけない。喉を潤したい気持ちのまま店を後にパブへ向かう。例の英国式一杯飲み屋である。エールを1ポイント。バーカウンターにある木製ハンドルにセットされているビールが、大抵はエールかビターという種類の英国独特の地ビールである。エールとビターは日本では飲むことができない。従って倫敦では片端からエールかビターを飲むことにしていた。木製ハンドルにビールの銘柄が記入してあるのでその名を言えばよい。昔倫敦のパブを訪れたとき全て現金払いであったはずだが、最近ではカードでの支払いもできる店が増えたようだ。だいたい£3.6ぐらい。日本円で500円ぐらいか。1ポイントは約568ml、大ジョッキ一杯ぐらいである。それをぐっと飲んでフラットに帰る。それが週末のお決まりになった。もっとも大学からの帰りが多少遅くなった日などにも、ちょっと立ち寄り半ポイントだけ飲んで帰ることもあったのだが、何しろ帰り道に行きつけのパブがあるのだ。



上左：ストーンヘンジは羊群がる草原に屹立していた

上右：倫敦塔の小窓から
(窓外にはタワーブリッジ)

下左：ローマンバスは今でも良い湯加減だった

下中：ロイヤル・ウェディングで馬の尻を見る

下右：ハチミツ色の石で作られたコッツウォルズの田舎町



構造設計インターンシップ体験報告

「インターンシップ」を体験して

大学院博士前期課程 1年 江原 修

私は、大学院の就学期間を1年間の実務経験として認定してもらうために、学外の設計事務所で180時間以上の就業体験を義務付けている「インターンシップ」を体験した。そこで今回、夏休み期間中の7月25日から8月26日までの約4週間、濱尾博文先生が管理建築士を務められるエーユーエム構造設計株式会社において構造設計の実務体験を行った。本稿では、今回のインターンシップおよびインターンシップ科目である「建築構造設計特別実習」を通して学んだことについて報告する。

建築構造設計特別実習は、建築物の構造設計に係る実践的な能力を培うことを目的に、実務設計に対応した具体的な設計課題を対象にして実務演習を行うという内容である。例年なら講義形式で行われる授業であるが、今年は震災の影響で福島県も甚大な建物被害を受けたことにより、県内各地の被害を受けた建物や仮設住宅の現場見学などフィールドワーク形式の授業展開となった。

いわき市豊間地区の津波被害の現場をはじめ、県立磐城農業高校、須賀川市役所、福島県林業研究センターの木材試験棟および加工棟の建物被害や郡山市内の仮設住宅の建設現場など様々な場所を見学することができた。また、福島県林業研究センターの木材試験棟および加工棟では、現場見学だけでなく、被災度区分判定の補助をさせて頂き、この授業を通して通常の授業形態では経験することができないようなことを経験することができた。

インターンシップでは、写真に示す郡山市立二瀬中学校校舎の耐震診断補助を行った。耐震診断とは、大地震発生時に倒壊させないため、建物に十分な耐震性能があるかを調査検討するもので、耐震補強する際の基礎的な資料となる。

耐震診断を行う過程で、最初の業務はAutoCadでの作図であった。平面図や展開図、各リストなどの図面を読み取り、伏図や軸組図を作図するという作業であったのだが、この作業を通じて改めてAutoCadの重要性が実感できた。私は今まで、学部2年次に開講されている「建築情報処理演習IV」の授業でしかAutoCadを操作したことがなかったが、操作経験があるかないかによって作業スピードが全然違っていただろうなと感じた。AutoCadを全く操作したことがなければ、作図する際にはより多くの時間を費やし、苦労していたと思う。この体験報告を読んでいる学生の中で、将来的に設計事務所やゼネコンで活躍したいと考えている人は、AutoCadの操作方法を学んでおくことをお勧めする。また、設計事務所によってはJw_cadを使用する場合もあるので、どちらも使えるというのがベストである。

次に、現場調査を行った。調査では主に震災による建物被害を調べると同時に、建物が設計図書通りに施工されているかを調査したが、設計図書通りに施工されていない部分が見られた。例えば、平面図には壁が存在するのに、実際には、改築され壁が取り払われている

場合や、開口部の有無や形状が異なる場合などがあり、伏図と軸組図を書き直さなければならなかった。

最後は、構造計算ソフトを用いて、建物の耐震性能の指標となるIs値を算出した。このソフトは、建物の形状、柱はり断面などの必要な値を入力すると、建物の耐震性能が計算されるソフトであるが、コンピュータから出力されたデータを必ず人間が確認しなければならない。この確認には多くの経験を積んだ人でなければ全体像を把握した上で、結果の正確さを判断することが難しいことが分かり、自分の経験不足を痛感すると同時に、非常に責任ある仕事だと感じた。

また、インターンシップ期間が終了してから、郡山市立二瀬中学校校舎の耐震診断判定会にも参加する機会が得られ、自分たちが診断した内容が適切かどうか判定されるまで携われることができた。判定会で適切だと判定された時には、苦労して頑張った甲斐があったと達成感を味わうことができた。

今回の建築構造設計特別実習およびインターンシップを通して、学業面で今年度の前学期中に経験したことは、学部4年間で経験したことよりも密度の濃いものとなった。しかしそれは、大学で得た知識が役に立ったからの話であり、インターンシップでは今まで大学で学んだことを実践する良い機会であったと同時に、これからより多くの専門知識を身に付けなければ、将来、社会では通用しないと実感できた場でもあった。

私自身大学院で学んでみて、学部時代には学ぶことができないような高度な専門知識を得ることができている、と思う。是非皆さんも大学院に進学し、インターンシップを体験して、それなりに勉学に励み、大学院の2年間で真剣に自分を見つめ直す時間として費やしてみるのはいかがだろうか。



写真 郡山市立二瀬中学校校舎

最後になりましたが、インターンシップの間中は濱尾博文先生をはじめ、エーユーエム構造設計株式会社の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして深くお礼申し上げます。

第15回東北建築学生賞で最優秀賞受賞

4年次生 仲田 亮 平

日本建築家協会（JIA）東北支部主催の由緒あるこのような審査会で、最優秀賞を頂いたことは、嬉しく思うと同時に、今でも信じられない気持ちでいっぱいです。今年は、学内で与えられた課題が、震災関連、その中でも福島原発事故による避難の問題を扱うといった、今までとは全く違う現実的で難しいテーマに取り組むことになり、建築で一体何ができるのだろうと悩みました。

結果、提案した内容は、「TRANSFORM-暮らしの記憶-」と題し、空洞化が進む郡山の中心市街地に、若年層を中心とした避難者の方が暮らす中間復興集合住宅並びに役場機能を持つ建築でした。それが街の再生の契機になると同時に、避難地域の縮小や本格的な復興に伴い、時系列で減築によって建物のカタチの変化を可視化することで、市民の復興への意識を共有化することを目指しました。

授業でのご指導や提出間際までエスキス頂いた先生方、また、木造仮設住宅の設計から復興に至る活動・研究をしている研究室の先輩方からのご助言、さらに手伝ってくれた友達の協力が無ければ、このような結果を得られなかったと思います。これからも、周囲の情報やご助言にアンテナを張り色んなものを吸収して、自分の表現の幅を広げたいです。

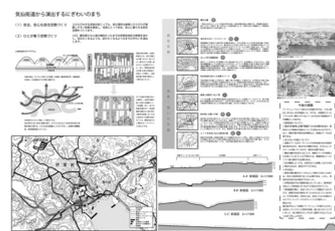


東日本大震災に関する全国学生デザインワークショップ

4年次生 薄井 隆生・大佐古 和明・小野 祐平

『浜とどう生きるか』をテーマに、日本造園学会が主催する東日本大震災に関する全国学生デザインワークショップが、9月4日～7日の日程で実施されました。ワークショップの主旨は、2011年3月11日の東日本大震災により津波被害を受けたリアス式海岸の宮城県南三陸町において、それまで町的生活基盤であった「浜」を容易に捨てるのではなく、街の存続、再生の糸口として土地の形状を読み込み、生存・生業のための環境資産として発見し、「浜」を「生活の舞台」として再生するランドスケープデザインの提案を試みることにあります。参加者44名の学生が6チームに分かれ、対象地区の戸倉・志津川・歌津を分担し、調査・提案を行いました。私達は、日本大学・札幌市立大学・宮城大学の混成チームとしてまとめ報告しました。

被災地に赴いて実際のスケールで感じたことは、私達はメディア報道の限られた情報でしか知り得なかった、ということ。被災地は生活・生産の場として壊滅状態でしたが、現地住民の方々の、その現況を受け止めて負けずに生きていくという姿勢を真摯に受け止め、4日間積極的に取り組みました。



提案作品の一部



南三陸町・伊里前地区の様子



調査・ワークの様子

仮設住宅からはじまるサステナブルな計画

准教授 浦部 智 義

このタイトルは、先般、大賞（住宅部門最優秀賞）を頂いたパッシブデザインコンペ提案書の副題ですが、研究室や私の友人・知人達と協働しながら活動・スタディーを行っている木造仮設住宅の計画・設計・建設やそれらの再利用も含めた様々な展開によって、福島県の復興の足がかりとしたいという願いを込めて題したものでした。

大規模な仮設住宅（地）の計画・設計は、当初戸惑いもありましたが、偶然にも恩師や仲間達とかつての研究成果を空間計画・設計の手法としてまとめた『建築・都市計画のための空間の文法（彰国社）』を執筆し終えた直後で、個人的思考としては近年薄くなっていた比較的大規模な建築（群）の計画・設計について久しぶりに意見交換していたことも参考となるなど、スタディーの持続・継続の大切さも再認識する契機にもなりました。

ちなみに提案書の主題は「二地域居住のためのロハスの家」でした。これは、長期化するかも知れない震災・原発事故からの復興に際し、エネルギー問題を風化させず真摯に向き合い新たなサステナブル社会の構築を目指すために、仮設住宅（地）を再利用した中間復興住宅にロハス計画を取り入れ、「ロハスの家」を学外にも展開するというコンセプトも含んでおりました。これらの提案には、そのモデルといえる「ロハスの家3号」や「仮設集会施設ロハス計画（本宮市）」の計画・設計はじめ全ての実践が貴重な経験となりました。このような遠大な計画は、粘り強さを必要とし地道な部分や未知数の部分も多いですが、結果として、福島県は復興を越えて、他の地域より早く未来を構築していたと言われる地域になる一助となるように、活動を続けていければと思っています。



ロハスの家3号



仮設集会施設ロハス計画

第54回日本大学工学部学術研究発表会

開催日：平成23年12月3日（土）

建築学部会 <第1会場：7033教室>

- ・重量床衝撃音発生器の開発
ー試作機による衝撃力安定性の検討ー
○中村俊幸, 濱田幸雄
- ・重量床衝撃音の評価方法の検討
ー試験音の特性と暗騒音の影響に関する検討ー
○井上恭平, 濱田幸雄
- ・吹抜けを有する空間の音響特性及び設計手法に関する研究
ー縮尺模型におけるエコータイムパターン測定結果と
実物における測定結果の比較ー
○鈴木極, 濱田幸雄
- ・レーザードップラー振動計の測定精度について
ーその1. 測定対象と振動計の角度の影響ー
○多喜翔一, 濱田幸雄
- ・レーザードップラー振動計の測定精度について
ーその2. 測定対象の表面仕上げ及び測定距離の影響ー
○須藤剛史, 濱田幸雄
- ・GL工法による遮音欠損の再現に関する音響模型実験
○添田太貴, 濱田幸雄
- ・音響模型実験による応急仮設住宅に適した間仕切り壁の検討
○橋本博貴, 濱田幸雄
- ・福島型避難方式に対応する木造仮設住宅に関する研究
ーログハウス仮設住宅の特徴についてー
○早川真介, 浦部智義
- ・東日本大震災後の復旧・復興に向けた公共施設に関する
住民意向
ー須賀川市中心市街地を対象としたアンケート調査ー
○片地昭后, 市岡綾子
- ・昇降のしやすさからみた階段の機能寸法に関する研究
ー昇降動作と足元のアキ寸法の関係ー
○太田成美, 若井正一
- ・会津地方の方三間仏堂に関する研究
○大山亜紀子, 重枝豊
- ・住宅外形とフラクタル次元 ースケール化と次元数ー
○渡邊絢, 倉田光春
- ・児童の遊び場に関する調査研究
ー移動スツール形状の違いによる利用実態についてー
○青木敦生, 土方吉雄, 三浦金作
- ・児童の遊び場に関する調査研究
ー下校路特性と遊び行為発生ー
○大貫恵司, 土方吉雄, 三浦金作
- ・地方都市における都市更新手法に関する研究
ー応急危険度判定からみた都市更新ー
○佐々木健人, 阿部純也, 土方吉雄, 三浦金作
- ・自転車走行環境整備に関する研究
ーレンタサイクル利用における経路選考ー
○鈴木聖太, 土方吉雄, 三浦金作
- ・東北地方太平洋沖地震による長期の避難所生活における
空間利用 ービッグパレットふくしまの実態調査ー
○高橋康弘, 土方吉雄, 市岡綾子

建築学部会 <第2会場：7034教室>

- ・遮熱塗料の遮熱性に及ぼすフィラーのキャラクターの影響
○齋藤俊克, 木村彰吾, 出村克宣
- ・遮熱塗料を塗布したコンクリートブロックの遮熱性評価
○木村彰吾, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・表面含浸材の透水抑制効果に及ぼす下地の含水率の影響
○齋藤耕司, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・地盤応答解析において平面ひずみ要素の動的縮小法に関する研究
○安齋泰弘, Buntara S. GAN
- ・NURBS形状関数を用いた有限要素法に関する基礎的研究
○関根秀一, Buntara S. GAN
- ・テンセグリティー構造の設計・解析及び施工計画について
○山本学, Buntara S. GAN
- ・動的縮小法におけるプレート要素の縮小に関する解析的研究
○小林直道, Buntara S. GAN
- ・梁柱部材の運動方程式に関する基礎的研究
○倉田光春
- ・梁柱部材のせん断変形挙動に関する基礎的研究
○徳永裕子, 倉田光春
- ・変位差置換に基づくマトリックス縮小法に関する基礎的研究
ートラス構造の場合ー
○杉山和隆, 倉田光春, Buntara S. GAN
- ・トラスの非線形挙動に関する実験的研究
ー解析解との比較ー
○三嶋謙裕, 野内英治, 倉田光春
- ・インベリアル・カレッジにおける非線形構造解析
○野内英治
- ・土壁用壁土の凍結融解に関する基礎実験
○浦憲親（金沢工大）
- ・既存RC建築物の耐震診断に関する研究
ー診断結果に影響する因子についてー
○本田優, 浅里和茂, 千葉正裕, 日比野巧
- ・2011年東北地方太平洋沖地震における日本大学工学部図書館の
被害状況
○江原修, 千葉正裕, 浅里和茂, 日比野巧
- ・2011年東北地方太平洋沖地震による中層RC建造物の
振動性状変化の検討
○海老沢智規, 千葉正裕, 浅里和茂, 日比野巧
- ・普通エコセメントを使用した再生骨材コンクリートの性質
ーフレッシュ性状及び圧縮強度・静弾性係数ー
○柳啓（建材試験センター）, 福部聡, 細野知之
- ・鋼製永久型枠を用いた寸法の異なるRC梁部材の曲げに対する
断面算定
○遠藤正美, 鈴木裕介, Sanjay PAREEK
- ・ネットワーク及び補修剤を用いた自己修復コンクリートの
繰り返し修復に関する研究
○大平旭洋, Sanjay PAREEK
- ・インドにおけるCO₂削減を目的とした無焼成レンガ
作製方法の検討
○齋藤雄仁, Sanjay PAREEK

工学部長指定研究に関する部会 <会場：7014教室>

- ・ロハスによるこれからの住環境形成への取り組み
○浦部智義
- ・公開シンポジウム「郡山から大震災と原発災害の今後を
考える」について
○Sanjay PAREEK

学 会 発 表

* 届け出があった記事を掲載

- 2011年日本建築学会大会 日時：平成23年8月23日～25日 会場：早稲田大学（東京都）
- 自己修復コンクリートの非破壊試験法による補修剤の充填性の評価 ○大平旭洋, Sanjay PAREEK
 - シラン系及び無機系表面含浸材を含浸したモルタル供試体の屋外暴露試験 ○斎藤耕司, 齋藤俊克, 出村克宣
 - RC構造物に対する自己修復層の適用に関する実験的検討 ○西脇智哉（東北大）, 大平旭洋, Sanjay PAREEK, 菊田貴恒
 - インドにおけるCO₂削減を目的とした無焼成レンガ作製方法の検討 ○齋藤雄仁, Sanjay PAREEK
 - BENDING TESTS ON PINNING-RETROFITTED MASONRY BEAMS WITH USE OF POLYMER CEMENT PASTES AS BONDING AGENTS ○Shrestha Kshitij C., Sanjay PAREEK, Araki Yoshikazu
 - プロセニウムを持つ劇場・ホールの管理・運営に関する研究 - 公立文化施設を事例として - ○坂上敦志, 浦部智義, 幸和紀, 高木義典
 - 病院内の医師の移動に関する研究 - 病院建築の計画要件に関する研究（その4） ○遠藤安泰, 浦部智義, 上野佳奈子, 早川真介, 中山誠健, 太田亮平
 - 17世紀末から18世紀におけるディンの平面構成について - ディン・トーハとディン・ハンケンの分析を中心として - ○大山亜紀子, 重枝豊
 - 変位差置換に基づくマトリックス縮小法に関する基礎的研究 - トラス構造の場合 - ○杉山和隆, 倉田光春
 - 低層RC造建物における耐震補強効果の検討 ○海老沢智規, 千葉正裕, 浅里和茂, 日比野巧
 - 既存鉄骨造体育館における柱はり接合部耐力の評価手法に関する研究 ○板垣鉄哉（開発設計コンサルタント）, 浅里和茂, 千葉正裕, 日比野巧
 - 鋼製永久型枠を用いたRC造梁部材の寸法効果に関する研究 ○遠藤正美, 鈴木裕介, Sanjay PAREEK
 - 床衝撃音遮断性能の最大A特性音圧レベルによる評価に関する聴感実験 ○濱田幸雄, 中澤真司
 - 住宅用火災警報器の設置に関するアンケート調査 ○佐藤博臣（ビューローベリタスジャパン(株)）, 栗岡均
 - 住宅用火災警報器の設置率に関する一考察 ○栗岡均（日本消防検定協会）, 佐藤博臣
- 平成23年度日本火災学会研究報告会 日時：平成23年5月16日～17日 会場：東京理科大学森戸記念館（東京都）
- 住宅用火災警報器の設置に関するアンケート調査 岡泰資, 村上史朗, 栗岡均, 佐藤博臣
 - 住宅用火災警報器の設置状況と規範意識の検討 村上史朗, 岡泰資, 栗岡均, 佐藤博臣
 - 販売データを用いた予測モデル（住宅用火災警報器の需要） 栗岡均, 岡泰資, 村上史朗, 佐藤博臣
- 40th International Congress and Exposition on Noise Control Engineering (INTER-NOISE 2011) 日時：平成23年9月4日～7日 会場：Osaka International Convention Center (OICC)
- Evaluation of heavy impact sounds with maximum A-weighted sound pressure level Yukio HAMADA
- 日本造園学会東北支部第10回支部大会 日時：平成23年10月15日～16日 会場：秋田県生涯学習センター分館 ジョイナス
- 景観形成に着目した都市更新手法に関する研究 - 街路景観構成要素の心理的評価と物理的評価との関係 - ○阿部純也, 土方吉雄, 三浦金作
 - 児童の遊び場に関する調査研究 - 移動スツール形状の違いによる利用実態について - ○青木敦生, 土方吉雄, 三浦金作
 - 児童の遊び場に関する調査研究 - 下校路特性と遊び行為発生 - ○大貫恵司, 土方吉雄, 三浦金作
 - 東北地方太平洋沖地震による長期の避難所生活における空間利用 - ビッグパレットふくしまの実態調査 - ○高橋康弘, 土方吉雄, 市岡綾子
 - 東日本大震災に関する全国学生デザインワークショップ 6班成果報告 ○大佐古和明, 薄井隆生, 小野祐平, 三上見菜, 五十嵐くるみ, 小林有里, 後藤みさと, 梅林満菜
- 2011日本インテリア学会大会 日時：平成23年10月23日 会場：近畿大学工学部（広島県）
- 階段昇降者の足元と段鼻周囲に構成される機能寸法に関する一考察 ○太田成美, 若井正一

学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

- Sanjay PAREEK and Akihiro OOHIRA: A FUNDAMENTAL STUDY ON REGAIN OF FLEXURAL STRENGTH OF MORTARS BY USING A SELF-REPAIR NETWORK SYSTEM, 3rd International Conference on Self-Healing Materials, Bath, UK, 27-29 June 2011
- Tomoya NISHIWAKI, Akihiro OOHIRA and Sanjay PAREEK: AN EXPERIMENTAL STUDY ON THE APPLICATION OF SELF-REPAIRING SYSTEM TO RC STRUCTURES USING SELECTIVE HEATING, 3rd International Conference on Self-Healing Materials, Bath, UK, 27-29 June 2011
- 熊田廣樹, 大平旭洋, Sanjay PAREEK; 「ネットワーク及び補修剤を用いた自己修復システムにおけるひび割れの自己修復性能に関する検討」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 33, No. 1, pp. 1445-1450, July 2011.
- 西脇智哉, 熊田廣樹, 大平旭洋, Sanjay PAREEK; 「連結材ユニットを用いた自己修復コンクリートのRC 構造物への適用に関する実験的検討」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 33, No. 1, pp. 1463-1468, July 2011
- Kshitij C. SHRESTHA, Sanjay PAREEK and Yoshikazu ARAKI: USE OF POLYMER-CEMENT PASTES AS BONDING AGENTS FOR PINNING RETROFITTING OF MASONRY CONSTRUCTION, コンクリート工学年次論文集, Vol. 33, No. 1, pp. 1661-1666, July 2011
- 齋藤雄仁, Sanjay PAREEK; 「インドにおけるCO₂削減を目的とした無焼成フライアッシュレンガ作製方法の検討」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 33, No. 1, pp. 1883-1888, July 2011
- 齋藤耕司, 齋藤俊克, 出村克宣; 「表面含浸材を含浸したモルタルおよびコンクリートの屋外暴露試験」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 33, No. 1, pp. 1637-1642, July 2011
- 齋藤丈士, 松永篤, 北口延郎, 齋藤俊克; 「残コン・戻りコンの発生とその処理に関する実態調査」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 33, No. 1, pp. 1919-1924, July 2011
- 齋藤俊克, 澤本武博, 齋藤丈士, 浦野真次; 「残コン・戻りコンの処理および契約に関する意識調査」, コンクリート工学年次論文集, Vol. 33, No. 1, pp. 1925-1930, July 2011

■栗岡均非常勤講師は、日本火災学会誌「火災」2011年6月号に「建築における水系防火対策の位置づけ」と題する論文を寄稿された。

■齋藤助教は、6月13日、日本コンクリート工学会(JCI)より、「残コン・戻りコンの発生抑制及び有効利用に関する技術検討委員会」の委員を委嘱された。

■阿部直人非常勤講師と秋月直道非常勤講師が参加する設計共同体は、6月22日、会津坂下町統合幼稚園新築及び統合小学校校改修工事等設計プロポーザル審査において、設計候補者に選定された(応募件数:9者)。

■土方准教授は、7月4日、喜多方市より、喜多方市都市計画審議会委員・会長に再任された。

■齋藤助教は、建築技術7月号「まるごと解体工事NOW」に、ものづくり大学大塚秀三講師と共同で「解体工事の実情」を寄稿された。

■浅里教授は、福島県建築安全機構が主催する「高校生が参加する地域防災授業」の一環として「地震のメカニズム」と題する講義を7~10月にかけて、県内4工業高校で行った。

■浦部准教授は、「ロハスの家3」の計画・設計に関連して、NHKラジオ「ラジオあさいちばん」に出演、NHKテレビ「サキどり(7/10)」で放映された。

■三浦教授、土方准教授、市岡専任講師は、7月11日、福島県より福島県景観アドバイザーを再度委嘱された。

■浦部准教授と浦部研究室は、7月13日、ホテルオークラ東京で開催されたパッシブデザインコンペで、住宅部門に応募した「ロハスの家」が3部門を通じての大賞を受賞された。それに関連して、「新建ハウジングWEB(7/29)・プラスワン(8月号)」「ケンプラッツ(7/22)」「PEN再生する家(10/15号)」等に掲載された。

■浦部准教授と浦部研究室の「集会施設のロハス化計画(本宮市)」の取り組みが、「新建築(8月号)」等に掲載、NHKテレビ「サキどり(7/10)」で放映された。

■浦部准教授と浦部研究室の「福島県応急仮設住宅」の取り組みが、「AERA(9/5号)」「建築士(9月号)」「建築ジャーナル(10月号)」等に掲載、NHKテレビ「おはよう日本(7/25)」で放映された。

■土方准教授は、7月27日、福島県景観アドバイザー派遣事業により、白河市大工町・手代町・袋町の景観まちづくり協定の設計等についての助言を依頼された。

■浅里教授は、8月1日、喜多方市より喜多方市新本庁舎建設基本設計業務プロポーザル審査委員会委員を委嘱された。

■倉持幸由非常勤講師は、8月5日、建築施工Iの授業の一環として、星総合病院移転新築工事現場(郡山市)の見学会を開催

し、約120名の学生が参加した。

■浅里教授は、8月5日、福島県より福島県庁本庁舎耐震改修基本計画・実施設計等業務公募型プロポーザル審査委員会委員を委嘱された。

■濱田教授は、8月23日、2011年度日本建築学会大会(関東)環境工学部門研究懇談会「環境工学研究の最前線と分野連携ー自然・生態環境と人工環境の融和に向けてー」において、音環境分野の主題解説を行った。

■速水准教授は、8月28日、東京大学出版会より『建築家と建築士一法と住宅をめぐる百年』と題する著書を発行された。

■大佐古和明君、薄井隆生君、小野祐平君(4年生・土方研)は、9月4~7日に南三陸町で開催された日本造園学会主催東日本大震災復興支援学生ワークショップに参加し、10月16日、その成果を日本造園学会東北支部大会のポスターセッションで発表した。

■市岡専任講師は、9月6日、福島県より福島県公共事業評価委員会を委嘱された。

■齋藤助教は、平成23年度レディーミクストコンクリート全国統一品質管理監査員として、9月に福島県内の生コンクリート工場(2工場)の監査を行った。

教室ニュース

■若井教授は、9月19日、日本住宅センター(東京都)にて開催された、日本インテリア学会関東支部主催の「東日本大震災の現地調査報告と今後の課題」研究会において「地震・津波・原発から半年を越えた今、被災地に学ぶこと」と題して講演された。

■土方准教授と土方研究室は、9月23日~12月26日の「まちなみづくりワークショップ」の企画・運営をNPO法人まざっせKORIYAMAより依頼され、まざっせプラザ(郡山まちなか交流拠点)で実施している。

■浦部准教授と浦部研究室(渡邊洋一院生(D1)、早川真介院生(M2)ほか)は、9月25日、UIA2011東京大会で開催された「フクシマの木造応急仮設住宅」に出展し、トークセッションに参加した。

■速水准教授は、9月26日、UIA2011東京大会で開催された、東京建築士会主催「東京を創る Realizing Tokyo after 3.11」にて、連続ラウンドテーブルディスカッション「before 3.11「政治と都市・建築・建築士」」にパネラーとして参加した。

■市岡専任講師と市岡研究室は、9月29日、ホテル虎屋(須賀川市)にてエリアキャンパスプログラム県中地域中間報告会を開催し、福島大学経済経営学類教授山川充夫研究室とともに調査報告を行った。

■土方准教授は、9月29日、伊達市より伊達市市民ホール(仮称)建設検討委員会委員を委嘱され、委員長に選出された。

■出村教授は、10月1日、日本大学総合科学研究所長に任命された。

■浦部准教授と浦部研究室は、10月1~2日、ビッグアイで行われた科学館10周年記念「科学の祭典inこおりやま」に「ロハスの家」をはじめ研究室活動の模型とパネルを出展した。

■土方准教授は、10月16日、日本造園学会東北支部大会のシンポジウム「ランドスケープ再生を通じた震災復興の提言」のパネリストとして「考・震災と都市計画」を話された。

■浅里教授は、10月21日、第16回東北CAE懇話会にゲストスピーカーとして招かれ、「建築構造物の耐震設計とその思想」と題した講演を行った。

■パリーク准教授とパリーク研究室は、10月22日、日本大学工学部次世代工学技術研究センターにて開催された公開シンポジウム「郡山から大震災と原発災害の今後を考える」の企画・運営を行い、パリーク准教授が講演された。

■青木淳氏を審査員に迎えて開催された、第3回日本大学桜門建築会学生設計コンペティションの第1次審査通過10作品に、応募総数46作品の中から小泉洋希君(4年生・浦部研)の作品「SHEA 廊下を建築に」が選ばれた。なお、第2次公開審査は12月10日に開催される(テーマ:「デザイン」の概念を変えた家)。

■若井教授は、10月31日、日本建築学会・倫理基本問題検討小委員会の幹事を委嘱された(任期2年)。

■若井教授と佐久間宏一非常勤講師は、郡山商工会議所主催の世界ベンチ・イス創作コンテストの審査員を委嘱され、11月6日、最終審査がハーモニーステーション郡山にて行われた。

■11月7日、土木デザイン設計競技「景観開花。8」で、坂上敦志院生(M1・浦部研)、佐久間皓惟君、宮戸洸一君(4年生・浦部研)の作品「電灯柱 ~水害から街を守る明かり~」が、一次選考にもれた作品のうち、協賛企業特別賞(ヨシモトボール賞)を受賞された。

■11月8日、せんだいメディアテークで開催された日本建築家協会(JIA)主催第15回東北建築学生賞で、13校14学科応募総数37作品中、仲田亮平君(4年生・浦部研)の作品「TRANSFORMー暮らしの記憶ー」が最優秀賞を受賞された。

■濱田教授と浦部准教授は、10月25日、福島県、大学、国の研究機関により発足した福島県応急仮設住宅等の生活環境改善のための研究会(委員長:福島大学鈴木浩名誉教授)に参加された。